

第18回

秀麗富嶽十二景写真コンテスト

入選作品

最優秀賞

雲間の一瞬

高津 秀俊（山梨県大月市）

百蔵山



白簾史朗氏講評

第18回の富嶽十二景の最高賞は高津秀俊氏の百蔵山からの作品が選出された。富士山には割と近く、撮り安いように思える百蔵山からの富士は、全景や中景の山波と富士山がなかなかマッチせず、最優秀賞を射止めたのは今回が最初だと思う。高津氏としても最優秀賞作は第14回に引き続いての2度目であり、昨今は応募作品の質の向上が応募者全体から見ても顕著であるので、今回の受賞はまさに実力といったところ。

たいていは横位置作品となるところを敢えて縦位置とした点が成功の元で、右手前の雪の付いたモミの木と富士山との対照がよく、高さと遠近感が良く表現された。殊に中間部の霧で山肌が省略されたことも画面の単純化を大きく助けている。

推薦

雲上くろがねの富士 瀬瀬 浩恭（岐阜県多治見市） 高川山



白簀史朗氏講評

これまた高川山からの富士山として出色の作品といえる豪快な表現である。高川山というと、通常は割と優美な表現が多いのだが、その理由は撮影位置の標高があまり高くないこと、中景の桂川の谷あいがひらけていることが影響している。作者はそこを考えてか、思い切って長焦点レンズを使用し、山頂部を大きく取り入れた。折しも富士山の中腹以上に好適な雲があり、それが富士山のアップ化に比例して雄大な表現となったこともプラスされる。半逆光の条件であり、通常はもっと大気が濁って表現されるものだが、この場合、非常にクリアな大気感表現となったため、画調が実に爽やかとなった。

このようにいつもと同じように撮らず、表現を変えることで作品はそれに応じて変貌することを会得してほしい。

推薦

雪余の朝 奈木 正次（静岡県裾野市） 御前山



白簾史朗氏講評

御前山は十二景中の山である九鬼山が、樹木の伸長で撮影条件が悪化、そのため暫定的に指定された山頂である。この山頂は前景の山がやや高いので不利であるが、この作品のように条件しだいですばらしいものとなる。

降雪直後のため右手以上方から左下にのびる貧乏山（徳山）と左奥の九鬼山が雪をまとった前景となって白雪の富士山を引き立てている。前景と中景、それと富士山とがくの字形となって構図上の入れこみも完璧であり、新しい視覚を提供している。こうしてみると、この御前山からの展望は冬季に限定されそうであるが、春の新緑、秋の紅葉にも期待が持てる。となると十二景山頂としての選定も本決まりとなることも期待される。

特選

目覚めの朝 村上 敏幸（山梨県大月市） 雁ヶ腹摺山



白簾史朗氏講評

やはり第一山頂、雁ヶ腹摺山からの富士山は美しい、の一語に尽きる。しかし、これも作者の精進が大きく生かされていることからこうした作品が生まれるのである。

遠景の富士山の光は鋭く、手前の雲に当たる光はまた赤みを失っていない。中間の雲海の光のないことはやや残念であるが、前景と富士山の光の対照が実によく生きて遠近感と距離感を申し分なく表現している。全体に光がまわってしまふと、この視点からはやや前景の描写がうるさくなるが、朝の雲海と光の少ないまわり方が、美しい富士山をさらに美しく表現することに貢献している。

特選

雲上たかく

小池 満雄（静岡県沼津市）

雁ヶ腹摺山



白簾史朗氏講評

通常は左方を広く撮っての構図が多いがこの山からの富士山であるが、この作品は逆に右方を広くとっての構図である。これは右の雲にかくされた中に、送電塔があり、それがじゃまになって右を切るわけであるが、この場合、送電塔が雲にかくされ、雲の走りがよかったため、右方を広くとったことになる。ほぼバランスはよいが、やはり右手下方に力がない。それにこの作品は撮影フィルムにコダックを使用し、使用印画紙もコダックであるので、本来は採用しないものなのである。こうしたコンテストでは、後援者に敬意を表して、その社の感材を使用するのがエチケットとされている。次回からはこうした点をよく注意して応募してほしい。

特選

荒れる山頂 大戸 康世（山梨県大月市） 大蔵高丸



白簾史朗氏講評

非常な好条件に遭遇したといえる作品であり、手前の翳りと富士山頂部とそこから右下へ流れる雲とのコントラストが実に美しい。少々残念なのは、この富士山頂部と右下への雲が白すぎて、デティール表現が不十分なことである。ちなみに応募作品の多くはこうしたデティール表現の不十分さと調子の悪さが第一にふるい落とされる。一見美しく見える画調も審査時には容赦なく落とされるので作者は心してほしい。

大戸氏のこの作品は、暗部（かげったところ）がもっと暗くなっても、上部の調子を整えるべきであり、そうすれば、さらに上位に進んだであろうことを付記しておく。

実に惜しい作品であった。

入賞

初夏の彩り 谷口 一只 (埼玉県加須市) 雁ヶ腹摺山



白簾史朗氏講評

前景の花むらの色調と画調、空部の冴えまでは完璧である。実に美しいといえる。しかし肝心の富士山の雪の調子表現が不十分であり、白く飛んでいる。審査評で調子が飛んでいる、ということは、その部分のデテールが不十分ということである。本当に惜しい、あと一息、というところで千仞の功を一簣に欠く、というのはこのことでまことに残念である。この場合の原因というのは露出で、ほとんどの部分は良好であるのに、山頂部だけ他に比して白い分だけオーバーになるからである。ほんの少し4分ノ1秒ほど露光値を切り詰めることで是正されよう。雪だけでなく、雲のかがやきなども同様である。

入賞

深緑

高津 秀俊（山梨県大月市）

姥子山



白簾史朗氏講評

題名どおり、まさしく深みどりであるが、やはりこうした場合はもっと爽やかな、いわゆる「新緑」または「浅緑」と題する季節の、いわゆる萌え出たばかりの緑をモチーフとしたい。また、PLフィルターを使用しているための強コントラストがわざわざしているともいえ、それらは空部の濃色と富士山の雪の描写不十分さが示している。何が何でもPLを使うということは、ときとしてノーマルでさわやかな調子であるべき点が重苦しくなるきらいがある。構図としてはやや右重りとなっているが、これもPL無し撮影であれば軽減されたと考える。

入賞

厳冬の朝 池田 浩樹（山梨県大月市） 牛奥ノ雁ヶ腹摺山



白簾史朗氏講評

条件も良し、全体がうまくまとまって申し分ないように見えるが、雪が多く、コントラスト強く力強くもあるが、何となく強すぎる感じの方が前に出てきて、冬の朝の雰囲気には乏しい。これはただでさえコントラストが強い被写体へ、さらにPLを使用したためであろう。そのため、手前の半面に光の当たった樹林が目立ちすぎ、それに富士山も調子が強く独立、中間の部分が暗く落ちすぎた故であろうと考える。よく注意することだが、何でも彼でも、いかなる場合にPLを使用することの是非をわきまえる必要がある。さすれば中間部の雪がもっと生きてきて、題名どりの画面となったろう。

入賞

雲の海に浮かぶ 谷崎 耕史 (大阪府大東市) 小金沢山



白簾史朗氏講評

撮り難い小金沢山からの富士山を霧の樹林上に配してうまくまとめている。好条件をうまく捉えたものだが、やはりそれには相応の下地があることがうかがえる。落ちついた仲秋の深山の感じが余すところなく表現されているそのことに感服する。ただ、ここで少々きびしいことを申し上げるが、データを見ると35mmで50mmレンズとある。小金沢山から富士山までは相当に遠い。50mmレンズではこの大きさには到底写らない。ブローニー判で250mmレンズ使用で、大蔵高丸あたりからの山体の大きさである。それとも部分引き伸ばしであろうか？とにかくフィルムを見てからのことになろうが。

入賞

雲棚びく富士

香川 恭賜（東京都八王子市）

大蔵高丸



白簾史朗氏講評

まず題名が不可である。たなびくという形状はただ雲が横に、また水平に走っている状態ではそういわない。引く、ということば通り、すーっと横に引くようにのびた状態をいい、たいてい一方（のびて行く方向）が細くなり消えて行くことをいう。

この場合は一種の雲海であるが、それも一少部分にのみ発生したものであり、通常雲海とも表現しない。それにやや単調であるので山頂部に雪の白さも欲しい。

強いて題付けるならば、中間部の雲の右手の空間、半分近くから切り、上部と下部をそれに合わせて切り「雲躍動して新雪富士」とでもした方がよかった。

入賞

ハマイバよりミツバ便り

権正 光夫（山梨県富士吉田市）

ハマイバ



白簾史朗氏講評

題名が、これまた物足りない。「——より——便り」はよいが、ここでは「ハマイバよりツツジの便り」としたい。ミツバでは不明確でいくらミツバツツジが写っていても不十分だ。さらにいえば「初夏の山よりツツジの便り」となれば完璧であろう。

作品は、色も美しく、色全体のバランスはよいが、富士山と中景の樹木がまん中近く位置していて落ちつきがない。光が弱く、富士山の描写は良好であるが、バランスの悪さは、もう少しカメラポジションを左方に移し、花むらと大谷ヶ丸をうまく組み合わせることを考えたい。このままでは富士山の右下方の空気が大きくじゃまになってくる。

入賞

紅に明ける 奈木 正次（静岡県裾野市） 滝子山



白簾史朗氏講評

構図的には完璧に近く、色彩的にも美しい発色である。このままでも上位、推薦、特選には充分値する作品であるが、何しろ滝子山の作品が他になく、作者じたい、すでに推薦に入っているので、この作品も入選に甘んじることになった。ただ、富士山頂がまん中に近すぎるのが気になるが、これは右下にあるべき三ツ峠山のパラボラアンテナが雲でかくされていて相殺というところだろう。

格調高い富士山の作品、という高度のものは仲々現れないものだが、この作者に限って、つねにそうした高度の作品を出品する。これはやはり、作品への執念と、それにとまなう実行動故であろう。

入賞

灰かに色づく

愛澤 和弘（埼玉県所沢市）

笹子雁ヶ腹摺山



白簾史朗氏講評

題名どおり、灰かに朝の色づきを見せる笹子雁ヶ腹摺山の富士山。この山頂からの富士山は、手前に送電塔が林立していて、まことに撮りにくい。山頂から見える山稜のあちこちを歩いてポイントを決めるのが大変で、撮りにくさ、アプローチの悪さでは滝子山と一、二を争う山でもある。そこを3月末に登ったのだから推して知るべしである。

作品は日の出の方角に薄雲があったのか、その間を透して射し出た太陽が山頂からしだいに中腹へと光と色づきを濃くした。通常あまりシャッターを切らないカットであるが、それが思いがけない効果を生んだ。山頂の位置、山体の大きさ、すべてに気が配られていてすばらしい出来栄えとなった。

入賞

初雪

内藤 元次（山梨県大月市）

奈良倉山



白簾史朗氏講評

撮影地点は、奈良倉山北面の林道上からだろうか。ちょっと残念なことはススキの切り株や雑木が雪の樹林に混じっていて少々ウルサイことである。天候はまことに美しく晴れ上がった朝で、11月の澄んだ大気の中、富士山がくっきりと浮かんでいる。

だが、雪の少ないこと、前述の前景の雑然としたたたずまい、もう少し整理できなかつただろうか。たとえば左方にのぞく樹枝を切り、右方は遠景の三ツ峠山と富士山との尾根の接点で切る。上空を少し切って下方はススキの伐り株の上あたり、これでほとんどうるさいものは整理されスッキリする。奈良倉山の作品が他にないための入選であるが、もっと各山頂の多くの作品を寄せて欲しい。

入賞

霧花咲く朝 愛澤 和弘（埼玉県所沢市） 扇山



白簾史朗氏講評

たかだか1000メートルちょっとの山頂からであるのに、意外と高山的展望に見えるのは、中景の山頂にガスのかかった山が上方にあること、富士山が中腹までガスで見えないことが、この効果を生んでいる。題名の「霧花（きばな）―」とあるような清新な透明感はないが、やわらかな春の陽ざしが感じられる作品である。いままでの扇山からの視点と一味異なった味があり、作者にとっても、これで何かをつかんだのではないか、と考えるところだ。

今回、この作者は、入選二点の成績であり、最優秀賞の高津氏の二点、推薦の奈木氏の三点に次ぐ二点の選を獲得した。この成績はやはり労を惜しまないふだんの実績がものを云ったものと考ええる。

入賞

春霞

佐藤 知津夫（山梨県大月市）

百蔵山



白簾史朗氏講評

今回恒例化している同山頂による作品の多さ、少なさがあり、そのため上位入選でのダブリと別に、入選においてもいくつかの山の重複があった。百蔵山もそのひとつに入り、この作品の最優秀賞作品の高津氏と同じ百蔵山からのものである、題名の「春霞」は、画面がそのまま霞に包まれた情景である。何ともいえない柔かい調子はめったに見られないものであるが、作者はこの画面の調子でなく、富士山にかかるガスその横線をテーマとしたのだと思う。惜しい、と思わせるのは、富士山上方の空をもう少し切り詰めていたらグンと高度感が加わったと思われるところだ。その点でまったく惜しいものだった。

入賞

桜花に囲まれて 伊藤 恵子（東京都大田区） 岩殿山



白簾史朗氏講評

ふしぎといえばふしぎ、それが季節のことわりといえば、そうとも受けとれるが、この地方ではサクラの花が開くとき、きまって富士山が冬に勝る雪化粧をして、私たちを喜ばせる。日本の象徴である富士山の白雪の姿、これまた春のシンボルであるサクラの開花、このふたつに勝る組み合わせはまず無い。

だが、月に叢雲、花に風のたとえどおり、この双方に好条件がそろうときもまた少ない。

だが、やや大気にヘイズがあるとしても、サクラは満開、申し分のない好条件といえ、ただレンズを向ければ、すぐさま名作ができる、というものではない。この両者をともに美しく似合いの組み合わせで撮るには、それまでの膨大な失敗や、不利に泣く体験を経なければならない。

入賞

夕暮れ 瀬沼 茂雄（東京都福生市） お伊勢山



白簾史朗氏講評

お伊勢山のモチーフというとサクラに富士が常識のようになっている。とすれば季節は春、撮影は早朝ということが決まってくる。

ところが作者は敢えてそれを捨て、秋の夕暮れどきを狙った。まったく正反対の狙いとは、いったい何だったろう。それはこの作品があますところなく語っている。淡い夕暮れ近い大気は淡く色づいて富士山を包みこみ、うっすらとした新雪が山頂部にアクセントをつけている。だが、この作品の見どころは富士山の裾に一線を引く名残の赤熱の線である。また、この富士山の淡い山姿こそ、富士山を表現するに、最も困難な調子といえる。

この場合、前景にある小枝のボケなどは何のじゃまにもならない。

入賞

凍てつく山肌

村上 敏幸（山梨県大月市）

高畑山



白簾史朗氏講評

思い切って引き寄せた高畑山の巨大な富士山。晩秋の寒々しい空気が見る人の心をも凍らせる初冬の富士の寒気のように直に見る人の心を凍らせる。画面の調子も題名とぴったり合っている。高畑山からの富士山は撮りにくいという定評？があるが、数多く訪れるとこうした秀作もできる。

ただ、残念なのは富士山の山肌正面に見えるくっきりと刻まれた登山道の跡である。でき得れば、もう少し遅い時期、もっと雪の量が多いときの方が、多少ともこの道跡が消え、時刻を選べば、その山肌が氷で光り輝く。そうした条件を捉えれば、まさに題名どりの「凍てつく山肌」そのものになるろう。

入賞

雨上がりの夕富士 松本 邦弘（埼玉県入間市） 倉岳山



白簾史朗氏講評

高畑山といい、この倉岳山といい、前景のヤブや樹林などにより、撮影条件が他の山々に比較して数段も不利な山である。そうした自らを不利に遭遇させても、ひとつの山に固執する情熱とは、いったいどのようなものであろうか。この作品もその不利に代わるものとして夕暮れの靄に溶け入った富士のアウトラインを以ってした。黄金色の富士のアウトラインは、このときこの山にあって、他に眼を向け得ない絶対的なものであったろう。惜しむらくは手前に入り込む小枝が、この神秘の瞬間の雰囲気を損ねている。市当局としてはこうした物体の除去にもっと意をいたすことが必要ではないだろうか。

入賞

壺峰富士 宮地 広之（東京都世田谷区） 九鬼山



白簾史朗氏講評

九鬼山頂は、植林のヒノキの丈がのびすぎて山頂から禾生(かせい)側に相当下ってからでない条件がよくなる。そこで暫定的に御前山を九鬼山と組み合わせて十番山頂としている。

だが、この九鬼山からの富士、撮影場所はともあれ、堂々として見ごたえがある。ややアップにしすぎて、逆に高度感に欠けたのは残念であったが、富士山じたいは申し分ない条件での秀作である。高度感が失われた理由は、山頂より低い尾根上からの撮影であること、手前の山体が見るからに低山であることと、そのボリュームが富士山と同程度となったからである。もう少し手前の山体を大きく入れこむことによって、富士山は、はるか高みに君臨したことと思われる。

入賞

秋光 奈木 正次（静岡県裾野市） 御前山



白簾史朗氏講評

同じ作者の推薦作品と、季節こそ違え同アングルの作品であるので、一寸抵抗があったが、上位作品は積雪直後、この作品は初秋ということ、上位作品とは別に入選作品には十二景の山頂からの作は必ず必要であることから、同山頂からの作品であっても採らざるを得なかった。こうした例は当然、他の山頂からの作品にもあり得る。

そのこととは別に、この作品も実に美しく、ことに色づき初めた初秋の山肌のかなたにくっきりと浮かぶ新雪鮮やかな富士山とのコントラストは比類ない。強いて欠点を探すと、左上部の九鬼山がやや重く、今後はこの山の処理が是非を問われることになろう。

入賞

白雪映えて 久根口 英二（山梨県都留市） 高川山



白簾史朗氏講評

何のケレンもなく、真正面の富士山にレンズを向けた、といった作品である。高川山から富士山を狙うとき、下方・人里をどのように入れ込むか、上空をどう切るかで誰しも迷うことが多い。作者は下部を一切省略し、上空にひろがる雲を大きく入れ込んだ。結果的にはそれが一番良かったわけであるが、まだ下方が切り足りなく、左方の富士山の裾から前山の尾根が上に向かっていていることが惜しまれる。下方をさらに切り、この上方に向かう尾根を切るとおのずから、上空の雲の入れ込みが変化し、左方の空の空きが狭くなってバランスが断然よくなる。つまり、そこから抜けていた力が堰き止められ、全体に行き渡るのである。次回のチャンスに参考にされたい。

入賞

雪纏う岩に仰ぐ 山下 政明（神奈川県秦野市） 本社ヶ丸



白簾史朗氏講評

この手の作品は、実はすでに数人の撮影者がいるので、さほど珍しいアングルではない。ただ、それらの作品と比較すると雪の量と形態、影などに別の変化があるので、そこが生きたわけである。しかし、同様の撮り方をする人は他にも多く、新しいアングルと思っても、すでに他が撮っている、ということは非常に多い。撮影時、誰もまだ撮っていないアングル、手法と思っても、さらにその上に行くことを意図してシャッターを切らなければならない。これは絵にせよ、写真にせよ、ものを創造する人間の必須条件である。次回は、作者自身そのものを是非とも見せていただきたい。

入賞

秋空高し 福井 一夫（埼玉県狭山市） 清八山



白簾史朗氏講評

雲の形状はまさしく秋のもの、撮影日も秋と思われるが、題名に秋を謳うには澄明さが足りない。靄があったか、露光値を間違えたか、という懸念がどうしてもつきまとう。これでもっと雲と富士山の雪の白さが際立ち、空の青が深く蒼く澄んでいたら申し分なくもっと上位に選ばれたと思う。また、レンズは放置しておくでホコリが溜って曇ってくるし、あまり神経質に拭きすぎても細かいキズがついてフレアーでこうした描写になることもある。いずれにしても一度、レンズの点検が必要。構図的、条件的には充分上位に入る作品であるので惜しいと思う。

それと、カメラにフィルムを入れたまま、長期間、撮影しないでいてもこのようになる。注意！注意！

総評

審査員長 白簾史朗

第18回を迎えた大月市「秀麗富嶽十二景写真コンテスト」の審査は本年1月27日、大月市役所三階の会議室に於いて、午後1時30分に開始され、227点におよぶ応募作品を厳正に審査決定して、午後4時に無事終了した。

審査員は、石井由己雄大月市長、東京電力、白簾史朗後援会々長・萩原剛、大月市観光協会々長・小林浩治に加え、白簾史朗が審査員長としてこれを行った。審査の方法は、従来通りに十二の山頂とそれに付随する副山頂より撮影・応募された作品を一番山頂から順に一堂に並べ、まず予備審査を一次・二次とおこない、最終候補作品を三次にて打ち切り、次の山頂からの作品に移るようにした。一山頂について平均3点から5点の候補をさらに厳選の審査、先ず最優秀賞から順に、推薦2点、特薦3点の計6点を決定、次いで各山頂作品から1点を選出するが、同傾向の作品、前回まで選出した作品に類似の作品も出来るだけ外し、新しい見解とカメラアイに依って撮影した作品を決定した。しかし、このコンテストの主旨目的は飽くまで大月市の観光宣伝の媒体を得るものであるから、いわゆる独善的な、単なる写真的といわれる主観の行き過ぎた作品を選ぶことはない。美しく、神々しく、いかにこの地がこのすばらしい眺望に恵まれているか、を他にアピールする作品を選ぶのである。

こうして数度にわたって行われた審査に依って、本年もまた素晴らしい26点の作品を得ることができた。227点中の26点、これはほぼ10分/1の確率で狭き門である。また、一山頂一点入選が原則であるが、その山頂作品に適当な良作がなかった場合、さらに上位、最優秀、推薦2、特選3の中に同山頂の作品が入選した場合もあり、今回のように雁ヶ腹摺山、百蔵山、御前山、大蔵高丸などが重複していることを了承されたい。

これによって今年も例年にも増してすぐれた作品を得ることができた。これについては勿論のこと、市当局をはじめ、各関係の関係者及びスポンサーのご協力、そして何よりも作品を提供して下さった応募者の皆さまのご尽力の賜である。

ここに謹んで御礼を申し述べると共に、また来期もすばらしい作品をご提供下さることを心からお願いする次第である。

有難うございました。